

OPI を到達目標とした授業計画とその結果

木村静子
国際大学

要旨

本校では各レベルの到達目標の一つにOPIを取り入れている。そこで、上級レベルではその到達目標を達成するためにどのような授業計画を立てたか、ということと、上級コースに在籍した二名の学生に対してコースの初めと終わりに実施したOPIの結果について述べる。

キーワード：OPI、(OPIのレベル) 超級・上級・中級・初級、談話

0. はじめに

本校では基礎、初級、中級、上級というレベルの日本語クラスを出しており、各コースの話す能力の到達目標の一つとして OPI を掲げている。それぞれのコースが一学年終わったときに目指している OPI のレベルは以下の通りである。

基礎 1-3 : 初級の上~中級の下

基礎 7-9 : 中の上から上の下

初級 1-3 : 中の下から中の中

中級 1-3 : 中-上から上-下

上級 1-3 : 上-中から上-上

そこで各コースがこの目標に達成したかどうかを調べるために一昨年より、学年末に OPI を実施することにした。実施の方法として一昨年は、基礎 7-9、中級 1-3、上級 1-3 については、学年の始め (10 月) と、学年末 (6 月) ³ に OPI を実施した。初級 1-3 は全くのゼロレベルから始めるため OPI は行う必要はないと判断し学年の始めには行わなかった。被験者である学生は、学年の初めには各コースから無作為に二名、そのコースの担当者が選んだ。しかし、学年の初めに OPI を行った学生が 1 年間日本語コースを続けずに途中でやめてしまったり、あるいは何らかの事情で学年末に OPI を行なえなかったりして、同じ被験者の 1 年間の伸びは測定することができなかった。そのため、昨年は学年の初めには OPI を実施せず、今年 6 月の学年末のみに実施した。その際の被験者は上級以外は各コース二名を、それぞれのコースの担当者が選んだ⁴。上級に関しては筆者が担当しているコースなので、学年の初めと学年末にほとんど全員に行なった⁵。OPI の実施はすべてのコースにわたって筆者が担当した。今年の結果は以下の通りであったが、目標に達したコースもそうでないコースもあった。

| コース名 | 被験者番号 | レベル |
|------|-------|------|
| 基礎 3 | 1 | 初級の上 |
| | 2 | 初級の上 |

| | | |
|------|----|------|
| 初級 3 | 3 | 中級の中 |
| | 4 | 中級の中 |
| 基礎 9 | 5 | 中級の上 |
| 中級 3 | 6 | 上級の下 |
| | 7 | 上級の中 |
| 上級 3 | 8 | 上級の下 |
| | 9 | 上級の中 |
| | 10 | 上級の上 |
| | 11 | 上級の上 |

そこで本稿では、①筆者が担当した上級コースでは OPI の目標達成のためにどのようなことを行なったか、②上級のうちの2名の学生 (No. 8、9) の OPI のパフォーマンスが学年の初めと終わりではどのように違ったか、あるいは違わなかったかの検討を述べることにする。

1. OPI の目標達成のための取り組み—上級コースの場合

1.1. 上級コースの概要

国際大学における上級コースというのは、授業時間約 315 時間終了後に入るコースである。授業は 1 コマ 90 分で週に 3 コマ、それに週に 1 回 30 分のチュートリアルがある。昨年度 (2004.10 月—2005.6 月) のコースの年間目標は以下の通りである。

- ・ 政治、経済、社会、文化について必要な情報を集めることができるようになる。
 - ① 政治、経済、社会、文化の新聞や雑誌の記事が読めるようになる。
 - ② テレビ、ラジオのニュースや番組が理解できるようになる。
 - ③ 発表などを聞いて質問ができるようになる。
 - ④ 他人の意見を聞きだすことができるようになる。
- ・ 集めた情報や自分の意見をまとめて、発表できるようになる。
 - ① 発表するトピックに適したことばや表現が使えるようになる。
 - ② 構成と論旨がはっきりした発表ができるようになる。
 - ③ 自分の意見を述べて、相手と意見の交換ができるようになる。
- ・ 話している場面に適した話し方ができるようになる。
 - ① 敬語が必要な場面では使えるようになること。
 - ② ことわざなどが使えるようになること。
- ・ 上級が終わったときに目指す日本語の能力
 - ① Oral Proficiency Interview Test(OPI) : Advanced high
 - ② JETRO ビジネス日本語能力テスト : J 2
 - ③ 日本語能力テスト : 2 級または 1 級

この年間目標を達成するために各学期で次のようなことを行なうと学生にアナウンス

した。

<上級1>

- ・ 言葉や表現を増やす。
 - ① 教科書で政治、国際関係、経済、産業の言葉を増やす。
- ・ 勉強した言葉や表現を定着させるために、
 - ① 聴く：テレビやラジオのニュースなどの聞き取り
 - ② 話す：情報をまとめて話す。また、質問をしたり、質問に答えたりする。

<上級2>

- ・ 言葉や表現を増やす。
 - ① 環境・科学・技術・社会の分野の語彙を増やす。
 - ② ビデオなどから、多用されている語彙や表現を学ぶ。
 - ③ 慣用句などの表現を学ぶ。
- ・ 話す・聞く・読む・書くについて
 - ① 話す：a 「説明する」「意見を言う」という目標達成のために、テレビ番組を見てその内容を説明する。また、それについての意見を言う。
 - b 挨拶や電話などの会話の練習
 - ② 聞く：テレビ番組やラジオのニュースの聞き取りを行う。
 - ③ 読む：新聞記事や少し長い読み物を読む。
 - ④ 書く：a 自国のことを説明するための発表の原稿を書く。
 - b テレビ番組などの簡単な要約を書く。

<上級3>

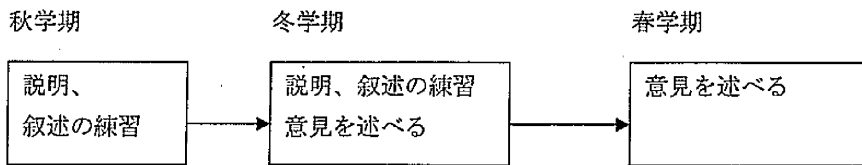
- ・ 言葉や表現を増やす。
 - ① 主に文化の分野の語彙を増やす。
 - ② ビデオや読み物などから、多用されている語彙や表現を学ぶ。
 - ③ 慣用句などの表現を学ぶ。
- ・ 話す・聞く・読む・書くについて
 - ① 話す：a 「意見を言う」「相手を説得する」という目標達成のために、ビデオを見たり、読み物を読んだりして、自分の意見を述べたりする。
 - b 日常やビジネスの場面で使う会話の練習
 - ② 聞く：テレビ番組やラジオのニュースの聞き取りを行う。
 - ③ 書く：自分の意見を述べるための発表の原稿を書く。
 - ④ 読む：新聞記事や少し長い読み物を読む。

では次に、以上のような目標のもと、OPIの目標達成のためにどのようなことを行なったか報告する。

1.2. OPIの目標達成のための取り組み

まず、目標であるOPIの上級の中あるいは上級の上に達成するためには、説明や叙述がきちんとできることに加え、自分の意見もかなりの程度言えなければならない。そのため、1年を通して図1のような試みを行なった。

図1



本稿では授業の具体的な内容については、「話す」ということのみ焦点をあてることにし、聞く、読む、書くには触れないことにする。

まず、秋学期には説明、叙述の練習を行うということで、15分ぐらいのビデオを見ることを宿題とした。本校の学生は大学院生であることと、専門が国際関係、国際開発、国際経営などであることから、経済、社会、IT関係のトピックを選んだ。次に質問表の質問に答えるという形でそのビデオの内容をクラスで確認した。多くの学生が聞き取れなかった部分などはもう一度ビデオを見直すことも行なったので、内容確認には40～50分かかった。そして会話クラスの日、日本人の会話ボランティアにビデオの内容を話す、ということを行なった。ビデオの内容を話すということには、①日本人に説明するというので、学生が内容をよくわかろうとする、②ビデオに出てくる語彙を使うことで、語彙の習得につながる、③ビデオを見ていない日本人に対してわかるように説明するための構成を考えるようになる、というような利点があると思われる。内容を話す、ということは学生にも好評だったし、ビデオを見るという宿題をしていないと説明ができないので、この宿題はよくするようになった。

冬学期もビデオを見てその内容を日本人に話すということは続けた。ビデオの内容は、教科書で環境問題や少子化などを扱ったので、できるだけそれに関連したものを見せるようにし、自国の環境問題や少子化問題なども説明させるようにした。さらに、冬学期は意見を述べる、ということにも入るため、新聞の相談欄などを読ませた。そして、その後、回答者の意見に賛成か反対かを理由とともに述べる練習を行なった。これはクラスの学生同士で行なった後、会話クラスで日本人相手にも行なった。

春学期にはビデオを見たり、新聞を読んだりした後、その内容についてどう思うか、あるいは賛成か、反対かなどをクラス全体で話しあうようにした。クラス全体で話しあった後には、会話クラスで日本人と学生の1対1で行なった。

OPIの上級の中、あるいは上を目指すために以上のような取り組みを行なったが、結果としては全員が達成したわけではなかった。そこで、学年の初めと終わりの2回OPIを受けた2名の学生(No.8、9)のOPIを分析してみることにする。

2. OPIの分析

ここではNo. 8と9の被験者が日本語上級コースを受ける前と、1年間（27週間）の授業を受けた後で、どのような違いがあったか、あるいはなかったかを検討することにする。

2.1. No. 8の被験者の場合

2.1.1. 被験者の背景

No. 8の被験者は国際大学での中級レベルを2004年6月に終了し、その後夏休み3ヶ月間を中国で過ごし、9月末に日本に戻ってきた学生である。一回目は中級終了時にOPIを行なったが、このときは中級の中であった。2回目は2005年の6月、上級クラス終了時に行なった。

2.1.2. 1回目のOPIの結果

1回目のときは、聞かれて答える、という中級レベルのことは安定してできていた。答えはほとんど一文レベルではあったが、ときどき「そして」で文をつないだり、「～とき」を使い複文になったりしていた。しかし、上級のタスクである描写、説明を求める質問に対しても段落は見られず、一文で答えたり、ことばを繰り返したり、文が完結しないで終わったりした。以下はその例である。

例1

<来日して、東京は静かだという印象を受けたという話しに続いて、東京と北京の相違点をたずねたところ>

A1: 東京と北京・・・う～ん、だいたい同じだと思います。

Q: じゃあ、北京も静かですか。

A2: 北京も、北京は、北京は東京より、う～ん、不便だと思います。

A1のように段落では答えられず、一文のみになってしまったり、A2のように質問と答えがちぐはぐになったりしている。

例2（来日する前の仕事についての質問に対して）

Q: 日本に来る前にどんな仕事をしていましたか。

A3: あー、仕事ですか？私は中国のしょうかん、証券監督管理委員会に勤めていました。

Q: そこでどんな仕事をしていましたか。

A4: 証券、中国の証券監督管理委員会に勤めていました。

Q: それはどんな仕事ですか。

A5: にんじんふ、にんじんで、にんじぶ、あー、human, human management、にんじぶ・・・。

Q: 英語はわからないんですが、どんな仕事ですか。

A6: にんじぶを・・・会社員の・・・会社員のしたいとき、会社。会社の社員をしたいとき、私の仕事は、たぶん新聞で広告、広告をして、新しい社員に会い、会い、会って、よ

かったら入りますという仕事です。

どんな仕事をしていたかという質問に対して、内容が説明できず A3 に続き A4 でも、勤めていた機関名を繰り返している。そして、再度仕事の内容を問うと、A5 のようにことばを探して何度も繰り返したり、英語で言ったりしている。そして、日本語で答えるように促すと、正確さは非常に落ちるが、A6 のように聞いていて仕事の内容が理解できる程度には答えている。

以上の 2 例のように、上級への突き上げの質問を行うとほとんどの質問で挫折をしていた。

2.1.3. 2 回目の OPI の結果

2 回目になるとまだ文法の間違ひは多々あるものの、説明を求める質問に対してある程度のまとまりで話せるようになっていた。

例 3 (国でどんな仕事をしていたかに対して)

うーんそうですね、そういう、日本では、そういうたとえば、東京、そういう、株式、取引所ですが、中国でも、そういう同じような、そういう株式所を、株式所を管理とか、管理とかする、けんが、監督、管理監督、そういう仕事。

例 4 (携帯電話の便利な点について)

A7: そうですね、今は、そういう、まずはどこでも、そういう、連絡できるし、それは、急、急な用事があったとき、会うとき、そういう、連絡できる、連絡もできます。

Q: 携帯電話の問題点って何かありますか

A8: 問題点は、そういう、うーん、人のそういう調子に、影響が、いいかどうかは今いろいろ議論があるんです。

Q: 人の調子ってなんですか。

A9: 自分の体調

例 5 (中国でも酒席でお酒を強要されることがあるというので、そういうことについてどう思うかという質問に対して)

そうですね、そういう、状況によって違いだろうと思います。たとえば、いい友達の中にそういう、たくさん飲んで、飲んでくださいと言うのは、いいと思いますが、そういう、あの一、普通の同僚とか、そういう、一般的な友達とか、そういう間に、そういう習慣が悪いかと、悪いだろうと思います。

例 6 (お酒を強要されたらどうするかという質問に対して)

中国では上司からそういう命令をもらったら、そういう、全部飲んだほうが良いと思います。

例3、4のように説明を求める質問に対して答えてはいるが、言いよどむことが多いし、説明が十分になされていない。また、例5、6のように意見を求める質問に対して、例5では「～ます。たとえば、～のは～が、～は～だろうと思います」と多少もたついた話し方ではあるものの談話を作っている。しかし、例6は一文のみで答えていて、意見を述べる質問に対して常には談話で答えられない、ということが示されている。

2.2. No.9の被験者の場合

2.2.1. 被験者の背景

No.9の被験者は、日本滞在歴は7年ぐらいだが、学校での日本語教育を受けたのは2002年からである。しかし、2002年からの初級コース、2003年からの中級コースはいずれも1学期で辞めていて、1年間続いたのは2004年からの上級コースだけであった。従って、日本滞在歴の長さの割には基礎的な部分が弱い上に、正式な授業を受ける以前に自己流で学習した時のまちがい定着してしまっていた。出身は中国の東北部であり、発音の面で母語の影響が強く残っており聞き取りにくいことが多い。しかし、この被験者には子どもがおり、その子どもの日本人の友だちやその親との交流があるようで、日本語を話すことには慣れている。

2.2.2. 1回目のOPIの結果

1回目のOPIは2004年10月7日に行なった。全体としては発音がとにかく悪く、外国人の発音に慣れていない人にはよく聞き取れないと思われる。筆者も何度も聞きなおしたところがあった。また、助詞、動詞の活用が正確ではなく、語彙も身近なことに範囲が限られていて、抽象的な語彙は出てこなかった。しかし、自ら話を続けていくことはでき、段落が出ている箇所もあったので、上級の下と判定した。

例7 (餃子の作り方の説明)

餃子は…さく、桜海老とか混ぜて、あと、醤油とか塩と、たま、卵、生卵入れて混ぜたら、少し……。

例8 (親と同居するという事で、何か問題がないか聞いたことに対して)

いえ、とうかい (都会) はあまりないです。はい。今は若い人は、ご夫婦はみんな両方仕事してるから、家族は(不明)生活の問題はあまりないです。

例9 (一人っ子政策の問題点についてたずねたことに対して)

じゃあ、もし、子供を一人だけ、ほんとに子供を大事な、子供を大事にしていますから、生活とか、教育とか、あまりにも少ないから、お金は、家族のお金全部子供に使い、使いますから、あの、大きくなったら子供はあまり、あの、生活の条件は、あの。

例7の餃子の作り方では材料を述べるにとどまり、順序立てて説明することができて

いない。また、例8では、一応まとまって話しているが、文中に「(不明)」とあるように、あとで聞きなおしてみても、発音の悪さからどうしても聞き取れない部分があった。例9は長さはある程度あるが、接続は「～から」のみである。また、「もし」という語があるが、仮説を立てているわけではない。さらに、一人っ子政策の問題点について、子どもに非常にお金をかけすぎる、ということをお願いしたいのだと思われるが、それは聞き手の想像をふくらませて理解できることである。以上のように段落で話せる部分は多いのだが、言いよどんだり、繰り返したり、自己訂正が目立った。また、語彙の広がりにも欠けていた。

2.2.3. 2回目のOPIの結果

2回目のテストは2005年6月8日に行なったが、1回目と比べて語彙が増えたとし、全体的に段落で話せるようになった。しかし、1回目よりは多少聞きやすくなったとはいえ、発音では母語の影響が依然として強いし、文法では正確さに欠ける部分がまだ残っていた。

例10 (雪祭りとハルピンで行なわれる氷祭りの違いについて)

いや、ちょっと違います。雪祭りは、雪で作ったの、いろいろの、ものですが、氷祭りは、全部、川の、氷で、作ったもの、で、あの、氷の中に、あの、ライト、入って、夜は、ライト、ついて、あの、とてもきれいです。

例11 (少子化をとめるためにはどうしたらいいかという質問に対して)

B1: そうですね最近あの、テレビとかニュースとかよく、わたしも見ました。日本は、あの、最近少子化とか、晩婚とか、未婚とか、いろいろの問題出てきました。でも、実は日本きたから、あの、物価、物価が高いし、子供の教育費も高いから、もし子供を、多かつたら、あの、親たちはたいへんな、経済的にたいへんだと思いますから、それみんな、あの、自分のためとか、子供の教育のために、ひとりとかも、ひとりっこも、多くなりますです。

Q: それで、少子化をとめるためには、日本の場合はどうしたらいいと思いますか。

B2: もし、日本の政府から、たとえば、んー教育費とか、何か政府から応援するかりてあげるとか、ゼイル、ゼイル、ディー、お金借りるときは、あの、り、利率、利率、少ないほうがいいが、いいなと思います。あと、日本の場合は、奥さんは、たぶん家でいますから、それ、それでも、奥さんも働いてないから、給料も少ないし、ひとり、ひとつ家庭はひとり働いてるから、収入が少ないから、もし、女性のほうも社会に出て働いたら、の政府からのいろいろ応援、のすること出たらいいなと思います。たとえば、あの、幼稚園の時間ちょっと長くなったりとか、会社から女性に、いろいろ、あの、じょうけー、じょうけー、たとえば子供めんどろの時間とか、急に何かあったらとれるかな、その方がいい、あったらいいと思います。

例10では、雪祭りと氷祭りの違いについて、多少ぎごちない部分もあるが説明はで

きている。例 1 1 は超級への突き上げの質問なのだが、それに対してはじめは実情を述べていたが、再度の質問に対しては、文法の間違ひは多々あるものの、「～ます。あと、～から、～し、～から、もし、～たら、～ます。たとえば、～とか、～とか～と思います。」のように、段落で答えている。1 回目は「～から ～から」だけでつなげていたので、それからみると、伸びが見られた。

3. まとめ

以上、国際大学で実施している OPI について、また、上級の 2 名の学生の OPI の結果についてみてきた。上級の学生については被験者番号の 8、9 のみに上級コースの初めと終わりに OPI を実施できたが、27 週間で 1 段階あがるのがやっとであった。OPI は初級、中級、上級、超級と 4 つのレベルに分かれており、超級以外のレベルはさらに上、中、下の三段階に分かれているが、上のレベルに行くほど、一つ上の段階に上がるのがむずかしいと思われる。上級コースに入る時点での学生のレベルはだいたい中級の上あたりなので、そのレベルの学生を上級の中、あるいは上まであげるのは、英語で授業が行なわれ、学内で使用されている言語が事務も含め英語で、そしてほとんどの学生が学内の寮に住んでいるという条件の下ではかなりむずかしいと思われる。それゆえ、授業の立て方を検討し、いかにしたら話す能力を引き上げることができるのか、ということの研究する必要があると痛感した。

注

- 1 初級と中級コースは 70 分授業が週 5 コマある。基礎 1-3 は 70 分授業が週 3 コマであり、基礎 7-9 は 70 分授業が 2 コマである。上級は 90 分授業が週 3 コマに原則毎週 30 分のチュートリアルがある。
- 2 基礎 7-9 というコースは初級 3 ぐらいのレベルから中級 2 ぐらいまでのレベルのコースであるが、授業で漢字も扱わず、読む、書くもほとんどない、話すことが中心のコースである。
- 3 IUJ の年度は 9 月が入学式で 10 月から授業が始まり、6 月に授業が終わる。
- 4 担当者が被験者を選ぶにあたっては、そのクラスの平均的な学生 2 名を選ぶようにした。また、初級 1-3 と基礎 1-3 コースの学生を選ぶ際には、上の基準に加え国際大学に来て初めて日本語を勉強した学生と、来る前に多少勉強したことがある学生をそれぞれ選んだ。
- 5 上級 3 まで残った学生は 4 人であったが、No. 10 の被験者の場合は 2 回目のインタビューが手違いで録音されていなかった。また、No. 11 の被験者の場合は、事情により 1 回目のインタビューを受けなかった。従って、OPI を二度受けたのが 2 名のみになってしまった。

- 6 2004年の上級1のコースで学生に配布したシラバスから引用した。
- 7 本稿の日本語クラスでは各レベルとも会話クラスに日本人ボランティアを依頼し、基礎、初級、中級は週に一度会話クラスを行なっている。上級と基礎7-9の場合は、それぞれ週3回と2回なので、隔週程度で会話クラスを行なっている。
- 8 発音が正しくないところには下線を引き、()の中に正しい語句を入れた。

参考文献

牧野成一監修 (1999) 「ACTFL-OPI 試験官養成マニュアル」 The American Council on the Teaching of Foreign Languages

牧野成一ほか (2001) 「ACTFL OPI入門」アルク

齊藤真理子 (1999) 「OPIを授業に生かす 第2回評価基準を考える」『月刊日本語』5月号

深谷久美子、渡辺摂 (2000) 「OPIを授業に生かす 第13回OPIによる学習者の追跡調査の結果の利用」『月刊日本語』4月号